

浮気心の旅

浮気心の旅

ポケット文春 566

1966 年 11 月 20 日 第 1 刷

1966 年 12 月 5 日 第 2 刷

定価 270 円

著 者 かじ梶 やま山 とし季 ゆき之 ©

発行者 上 林 吾 郎

発行所 株式文藝春秋
会社
東京都千代田区紀尾井町 3

印刷 凸版印刷
製本 中島製本

Printed in Japan

万一落丁乱丁がありました場合はお取りかえします

浮
氣
心
の
旅

梶
山
季
之

文藝春秋

除 糴

目次

浮気心の唄

美談と真相……………	9
バックの戦慄……………	15
ある夜の殿様……………	21
口実のむずかしさ……………	27
免許皆伝……………	33
「有難う！」……………	39
アリバイについて……………	45
怖い怖い話……………	51
口説き文句……………	57

別れは冷たく……………63

浮気心の旅

I アイ a アム a ア b ボ o イ y……………71

切ったバナナ物語……………77

密室の作法……………83

EXIT……………89
エキサイト(?)

メキシコの氷……………95

バンザイ!……………101

黄色いサクランボ……………107

戦慄の一夜……………113

アイゴー・オンマア……………119

恥さらしの聖夜	131
自家発電の夜	137
とんだ功德	143
性生活の知恵	149
美しき誤解	155
真昼の出来事	161
またもや落選	167
波止場の涙	173
ズイキの美女	179
こーうん	185
トルコ指南	191
葉猥	197
ハリウッド・スペシャル	203

英語無用論	209
アメリカ人に威張る法	215
赤チン譚	222
梅干の災難	229
慚愧のいたり	241
グラマー変じて	247
私の機嫌節	253

浮気心の唄

美談と真相

……世の中には、美談と称するものが、いろいろと存在する。だが私に云わせたら、美談なんて、政治家の自叙伝と同じで、大方でっちあげのことが多いのだ。かくいう私も、ある先輩作家の随筆に、美談の主として、二度ならず三度まで登場している。

むろん、匿名であるが、読まれて、ご記憶の人もあるかも知れぬ。

その美談の骨子は、微小な動物にとりつかれた私が、駆除法を問うて来たので、へ水銀軟膏の存在を教えた。教えられた私は、よほど高価なものだと思いこみ、全集を売って薬屋に駆けつけた——というものである。

水銀軟膏の値段を知らぬ私が、全集まで手ばなし、恐る恐る薬屋に入って行った純情ぶりが、美談のタネらしい。

これは実話である。しかし私は、その先輩作家に、

「どうか僕の名前だけは出さないで下さい」

と、これまで頭を下げて頼んで来た。

「変な奴だな。良い話だし、儲け役だから、名前を出した方が株が上るぞ……」

と、その先輩は云ったが、私は拒絶した。

それは、なぜか――。

実は、この美談のあとに、悲しい物語があつて、私は美談よりもその後日談の方を即座に思ひだすのである。だから、ユーウツなのだ。しかし、美談の主は自分だと、名乗りを上げたか
らには、真相を告白しなければなるまい。

――何年前か忘れたが、まだ私が代々木のアパートに住んでいた時分だったと思う。ある夜、酔つていて、新橋で行きずりの女を買った。私は、こと梅淋には用心深い方だから、酔つていても、ゴム製品だけは必ず使用する。

その夜も一個を使用し、新宿に出て飲み直し、アパートに帰った。だが数日後、私はある異状に気づいた。やたらと痒いのである。

そこである晴れた日に、ワイフを使いに出して、丹念に下腹部の繁みを実検した。そうして根元に獅^{しが}噛みついてゐる、フケに似た微生物を発見したのであった。コロモ虱でない方の虱である。

私は、新橋で買った女が犯人だと直感し、ついでワイフと交渉を持ってなかったことにホッと安堵を覚えた。

この微小動物にたかられたら、毛を全部剃り取るのが一番よい、と云われている。しかし、そんなことをすれば、不潔な夜の女を買ったことが、ワイフにばれてしまうし、恥ずかしくて銭湯にも行けなくなるではないか――。

私は首が痛くなるのを我慢して、ピンセットを使い、陽だまりの中で、その憎らしい小動物の駆除につとめた。

この動物は、二本の毛を、左右の手足で抱え込み、皮膚にピッタリと貼りついている。だから先ず、ピンセットの先で、貼りついた腹の部分を剃がし、ついで一方の毛にからんだ手足を抜きとる。そして今度は胴体を持ち上げると、すーっと捕獲できるのだった。

この作業のおかげで、二、三日は痒くなくなった。ヤレ、ヤレと思っていると、またぞろ変な感触である。

私はDDTをふり撒いた。しかし、それも数日しかもたない。成虫は死んでも、卵は死なないからである。艶のいい縮れた毛の左右に産みつけられ、銀白色に光っている卵は、まさに芸術品と呼ぶにふさわしかったが、私はなにもその小動物を飼育する積りはなかった。

「卵が殺せないで、剥るよりいいのか？」

私は、そこで思いあまって、先輩作家に電話を入れたのである。私の打明け話を聞くと彼は

カンラカンラと打ち笑い、

「きみ、そりゃア水銀軟膏で一発だよ」

と云った。

私は生れつき、銀とか金に弱い。水銀軟膏だから、よほど高価な薬なのだろう……と思いこんだのも事実である。

ワイフに内緒で金をつくるとしたら、文学全集でも手ばなすより、当時の私には方法はなかった。

へ身から出た錆か……

そんなことをボヤキながら、こっそり書架から文学書を持ちだし、古本屋へ叩き売って四千五百円の金をつくった。私は、すぐその足で薬屋に行ったが、流石にすぐには水銀軟膏とは云いだせず、歯ブラシとか、ポマードとか、必要のないものを買ひ、帰り際に、ふと思ひ出したような表情で、

「水銀軟膏……ある？」

と訊いた。

薬屋の主人は無表情に奥へ引っこみ、

「ハイ、あります。五十円」

と、ブリキ製の小さな容器を差し出した。私は、たった五十円のために、文学書を売ったこ

とを、大いに悔んだ。大急ぎで古本屋に引き返してみると、十分前に売った私の全集に、一万八千円ナリの正札がかけられているではないか……。私はあきれ、そして泣いた。

先輩作家は、ここまでを美談として、いつも使用しているわけだ。だが、そのあとに悲しい、悲しい物語があるのである。

……古本屋の親父と、ケンカして、しょんぼりとアパートに帰った私は、手にしていた水銀軟膏の存在に気づいた。

へたった五十円の安薬で、本当に卵まで死ぬのかなあ……。どうせ効きそうもないから、タップリ塗ってやれ！

私はトイレに身を隠して、その薬を、たっぷりと塗りつけた。全集を売らせた、憎い小動物を懲らしめるために、薬を全部わが下腹部にすり込んだのである。ところが、一、二時間もすると、皮膚がヒリヒリしはじめた。だが私は、気にしなかった。

猿又が少しべつついて、気持ちわるかったけれど、DDTでも死なない卵を殺すのだから、ヒリヒリするのが当たり前だ……。私は考えていたのである。

だが、真夜中になると、坐っても立ってもおられないぐらいの激痛に襲われだした。

へ痛てて……。痛てて……

私は歯を喰いしぼり、その痛みと一晩中、戦いつづけたのである。睡眠不足と疼痛のため、

フラフラになって朝を迎え、トイレに駆け込んで問題の部分を見ると、赤く腫れ上って、触れただけでも痛い。

へどうしたんだろう？」

と、私は気が気でなくなり、煙草を買いに行くといワイフに告げて、赤電話のある店に走って行った。走るだけで、ズキン、ズキンと痛むあたり、どうも尋常ではない、と思われた。

さて先輩作家を「急用です」と叩き起こして貰い、私が症状について訴えかけると、彼は睡そうな声で、

「そうだ、話すのを忘れてた。あれは、つけて一時間後に風呂に入るんだ。もう一度ぐらい繰り返すと、理想的だよ、ウン。三時間以上つけていたら、タダれるよ。じゃあ失敬——」

と一方的にしゃべり、電話を切ったのであった……。

なにが理想的だよ、ウン、だ！ 私は脱兎の如くアパートに舞い戻り、銭湯があくのを待てないので、ワイフにお湯を沸かして貰い、タライの中で薬を洗い落したが、強力な軟膏でタダれた皮膚を洗い流すその作業の、痛かったこと、熱かったこと！ その上ワイフには叱られるし……こんな惨めな想いをしたことはない。

私が、毛虱美談を嫌悪するテンマツは、以上のごとし。美談なんて、真相はおおむねこんなものである。蛇足だが、私がそれ以後一カ月近く、使いものにならなかったことを、付記しておく。

バックの戦慄

……私がオカマというものに、興味を抱きはじめてのは、まだ阿佐ヶ谷で売れない原稿を書いていた時代だから、かれこれ十年あまりになる。断っておくが、私は男色家ではない。ただ小説のネタのために、興味を持ったに過ぎぬ。

あれはちょうど、八月に入って間もなくの、暑い夏の午後だった。

私はその日、早いうちに銭湯に出かけ、その帰り、肩があまり凝っていたので、マッサージの看板を出している一軒の家を訪れた。

二階の三畳が、治療のために使われており、清潔な床がのべてあった。

間もなく手探りで、四十二、三歳の盲目の男が、白い術衣を着て現われ、丁寧に挨拶してから、マッサージをはじめた。三方の窓が開け放しにしてあり、涼しい風が入ってくる。